

## 393 肝のRI画像と区域読影について

小山田日吉丸、照井頌二、川合英夫、福喜多博義  
(国立がんセンター 放診 RI)

最近の肝臓外科や他科の各種診断法の進歩は、肝臓治療法選択の段階において区域レベルでの論議を日常のものとした。それに刺激されてわれわれは肝のRI画像上でSOLによる欠損像についてその占拠区域の同定を試み、かなりの程度にそれが可能であると考えられることを昨年の本学会総会で報告し、あわせて従来から成書に記載されているシンチグラム上の区域表現法に誤りのあることを指摘した。区域の区分法はCouinaudの方法に従っている。

今回は更に多くの症例について、占拠区域が判明しているSOLが、多方向シンチグラム像及びSPECT像上に表現される領域を検討し、より具体的に区域の同定を試みたので報告する。

## 394 肝SPECTの臨床の有効度に関するCooperative Studyについて

小山田日吉丸 (RI協会医学薬学部会エフィカシー専門委員会、国立がんセンター)、飯尾正宏 (委員長、東大)、町田喜久雄 (副委員長、東大)、飯沼武、松本 徹 (放医研)

最近では、シングルフォトン放出核種を用いて各種臓器についての断層シンチグラフィ (SPECT) がかなりの施設で行われるようになってきた。その内、最もしばしば対象とされる臓器に肝臓があり、SPECTの臨床の有効度についていくつかの発表がなされている。

現在、表記の委員会では、肝臓のSPECTの臨床の有効度を、より客観的に評価することを目的として、11施設の協力を得て近く詳細な検討を行うべく計画している。

今回はわれわれの作成したプロトコール、RI画像の読影および評価の方法等について報告する。

なお本研究を実施するにあたり下記の諸先生の協力を得ている。内山 暁 (山梨医大)、宇野公一 (千葉大)、川上憲司 (慈恵)、久保敦司、高木八重子 (慶応)、日下部きよ子 (東女子医)、館野之男、山崎統四郎 (放医研)、中島哲夫 (埼玉がんセンター)、西川潤一 (東大)、村田 啓 (都養育院)、油井信春 (千葉がんセンター)

## 395 腹部疾患における核医学、超音波複合画像診断の臨床的有用性

野口雅裕、大塚幸雄 (東邦大・一内)、佐々木康人、黒澤 洋 (同・放)、三浦慶和、丸山雄三 (同・中放RI)

核医学画像検査と他のモダリティの画像検査を組み合わせることで、各検査で得られる情報を相補的に利用して診断に資することができると考えられる。この観点に立って、核医学検査室内に超音波診断層装置 (US) を設置し、核医学検査後、該当者に超音波検査を施行している。今回は、肝スキャンを中心に、USとの対比を行ない腹部疾患各病態に対する得失を以下の方法で検討した。USが新しい情報を供した場合 (A)、追加情報を供した場合 (B)、核医学検査所見を確認した場合 (C) の3つを有用とし、核医学検査所見を確認し得なかった場合 (D)、かえって混乱を招き間違った臨床意志決定に導いたもの (E) の2つを有用でないと判別分類した。これまで検討した34症例では (A) 8、(B) 5、(C) 12、(D) 13であった。(A) と評価した症例は、胆石、肝癌、腹部リンパ節腫脹など肝外病巣の検出および肝スキャンで検出し得なかった局在病変の検出であった。(D) の大部分は慢性肝疾患で、USが診断に寄与しなかった症例である。さらに肝胆道、膵、Gaシンチグラムについても同様の検討を行なっている。

## 396 in vivo 標識Tc-99m 赤血球を用いたRI-Angiographyによる肝海綿状血管腫の診断

浜田俊彦、杉村和朗、石堂伸夫、山崎克人、橋本今日子、鍋島康司、増林 勇、西山章次、木村修治 (神戸大学放)、伊藤一夫 (国立神戸)、井本 勉 (神鋼病院)

肝海綿状血管腫5例、原発性肝癌5例に対して、in vivo 標識Tc-99m赤血球を用いたRI-Angiographyを施行し、腫瘍と周囲の肝に設定した関心領域のtime activity curveを解析した。肝海綿状血管腫の全例において腫瘍部分は早期に欠損像を呈したが、プール像において明らかな集積がみられた。またtime activity curve では、静注後、数分から10分以上にわたってゆるやかな上昇を認め、正常肝のtime activity curve と明らかに異なっていた。原発性肝癌では、血流相早期に腫瘍部分に強い集積を認めたが、プール像では明らかな集積像はみられず、curveにおいても海綿状血管腫のような経時的なactivityの増加は認めなかった。

本法は肝海綿状血管腫の血行動態上の特徴をよく反映しており、time activity curve のパターンによって、原発性肝癌との鑑別は可能と考える。本法は非侵襲的な肝海綿状血管腫の診断法として有用と考える。